

中国の唐芋事情

NPO カラー芋ワールドセンター
東アジア唐芋友好協会会長

ごうはら 郷原 しげき 茂樹

私は九月下旬、中国の湖北省紅安県に出かけた。同県で三年前に唐芋栽培に参入した周徳順氏（57）が収穫祭に招いて下さったからである。

周氏はこれまで蟹の養殖を大規模経営されており、それを息子に委ね、あらたに唐芋の栽培を始めた。わずか三年の期間に、百ヘクタールという日本では考えられない広さの畑で、紅、紫、白などの各種の唐芋を栽培し、青果用として市場に出している。年商は三億五千万円。日本の都市体育館ほどに大きな芋の貯蔵庫兼事務所などの他、もう一棟、これも同じぐらいの大きさで選別ライン、加工施設などを整えている。



大規模な集荷場兼事務所

この日は各種唐芋のパウダーを初めて製造し商品化するという、いわば新事業がス

タートした日であった。隣接する農場では唐芋の初掘りがなされていた。



広々としたパウダー工場

二つの建物の間は庭園となっており、広い駐車場の奥に収穫祭会場としてステージが特設され、収穫を祝う芸能などが盛大に披露された。



盛大な収穫祭

またこの日、商品化をはかった唐芋のパウダーに関するシンポジウムが開かれた。周氏の栽培はもとより、加工事業にかける意気込みが素晴らしかった。



初生産された有色芋の生パウダー

中国では四、五年前から、唐芋の栽培が急激に拡大されている。その背景には国策がある。すべての土地は国有となっており、農民は国から農地を借りて使用する権利をもっている。しかし経済の改革開放政策により、都市へと農民が移住する傾向が強まり、遊休農地が増えた。そこで政府は農民から使用権をあずかり、大規模農業をめざす有志に貸与する政策を打ち出した。それが七年前で、農地を借りる側は、会社または合作社を設立しなければならなかった。

農地の活用として従来は稲や落花生などが主であったが、新たな参入社はほとんどが唐芋を選んだ。理由は唐芋が健康食品として見直されているからだという。

周氏が三年前に参入した前後、紅安県で各社が次々と参入し、大小合わせると現在三十二社に及ぶ。

周氏の会社が車で周辺を案内してくれた。その際、姚峰氏（40）と会えた。姚氏は四年前に夫人とともに合作社を設立し、百ヘクタールの農地で青果用唐芋を栽培し

はじめた。現在二千二百トンを生産している。出荷先は隣接する武漢市の市場である。武漢市には巨大な民営市場が三ヶ所あり、他に多数の民営市場がある。

中国の唐芋の主な消費は各家庭で蒸して食する例が多い。食料難の時代には主食も同然であったので唐芋を嫌う世代もあるが、若い世代は手軽な健康食として好む傾向がある。

しかし生産増に比例して消費が増えず、最近は唐芋の市場は低迷している。姚氏は高値で出荷するために、春先まで貯蔵することにし、畑を掘り込んで半地下の貯蔵庫をつくった。屋根全体に土をかぶせてあるので暖房などは必要ない。煉瓦作りで三百トンを貯蔵できる。総工費は五百万円で、五分の一を紅安県政府から補助を受けた。

姚氏は「農繁期には近所の人も働いてもらう。地元で職場があるのはとても大切なことなので、ぜひ成功させたい」と語った。

私たちは日本、中国、韓国の三ヶ国で、東アジア唐芋友好協会をつくり、毎年一回、持ち回りで唐芋をテーマとするワークショップを開いている。去年は9回目で、中国で開催された。

それを主催したのが、王立国氏（45）である。もとは商社マンであったが、四年前に天津市で唐芋の栽培に参入した。一年目は病虫害でほとんど収穫できなかった。そこで中国農業大学の劉慶昌教授に相談し、バイオ苗を活かすことを学んだ。さっそくそれを取り入れることにし、自ら芋畑のなかに大がかりなガラスハウスを建てて、バイオ苗を育てる事業をはじめた。現在、六千トンの唐芋を生産しているが、市場価

格は全体の生産過剰で低迷しており、収益性はよくない。しかしバイオ苗の販売は順調で、今年は2700万株を出荷した。来年は8000万株に増やす予定。今年の年商はおよそ五億円。

「今後は加工も手がけ、6次産業を立ち上げたい」と将来に希望を抱いている。

王氏がスタート時に相談した劉教授は東アジア唐芋友好協会のリーダーである。そ

の後、王氏もその活動に参加し、中国における第9回大会を主催した。周徳順氏もこの活動に早くから参加しており、今回の収穫祭には劉教授も王氏も招かれた。また唐芋関係の行政、研究者なども多数参加し、画期的な情報交換の場となった。

今年の10回大会は十一月に沖縄の読谷村で開かれる。劉教授によると、中国からは四十名ほどが参加する予定だという。